現地視察

日本の森林・里山と林業の現状

日時：平成２１年８月１日（土）　１０：００～１５：００

講師：竹中　千里、田中　広樹（あいち海上の森大学コーディネーター）

概況

【視察1】

トヨタの森の森林は、昭和40年頃までは、地域の人々の生活と密着した「里山」として利用されてきた。しかし、その後、エネルギー革命の影響などにより、利用されなくなり、荒廃した状態で放置された。そこで、地域の自然環境に係る調査結果を詳細に検討され、整備ゾーン、保全ゾーン、活用ゾーンの三つに大別して整備が進められている。整備ゾーンでは、森をきちんと整備することで森林の内部に「光と風」を入れることができ、生物が生育しやすい環境づくりを目的としている。さらに保全ゾーンでは、貴重な生物を守り育てる活動を行なっている。特に貴重な生物だけを保護するのではなく、いくつもの貴重な生物が生きられるよう、生育エリア全体を効果的に保全するよう心がけているのが特徴である。そして、活用ゾーンでは自然循環の中でも重要な活用方法について様々な検討を行なっている。こうした取り組みは都市近郊林を活性化し、都市環境の改善に役立てることができると考えられる。

【視察 2】

豊田森林組合の木材センターでは、伐採されたスギやヒノキの質のちがい(材質の良否)と長さを観察することができた。お話によると、スギやヒノキなどの市場価格は長年にわたって低価格で推移しており、低採経費も出ない状況にあることがわかった。また、スギやヒノキなどの樹皮の処理費用も多くかかるとのことであった。

【視察3】

豊田加茂地域の間伐実施森林は、スギとヒノキが47年生の植林区域であり、高性能林業機械による列状間伐が行なわれた場所である。高性能林業機械の特徴を最大

限に生かすため、2残 1 伐の列状に間伐することで、より低コストでできるようになる。また、そのためには作業路地を使いやすく、安全かつ、低コストで整備することが重要となる。

【視察 4】
小径木加工工場では、間伐材などの小径木を有効利用するため一定の太さの丸棒にする加工施設で、地元で切り出されてきたスギやヒノキなど木材の丸棒加工・仕上げまでを行っている。加工された丸棒は、公園・土木用の木杭やガーデニング製品として用途があり、今後の需要が期待されている。